



セネガルの子どもたちに教育を！

# バオバブの会 ニュースレター

2013年 No.3

(通巻29号)

7月21日発行

厳しい暑さが続いています、お元気でお過ごしでしょうか。

今号では、上半期後半の活動報告を中心にお届けいたします。上半期は、TICADV（第5回アフリカ開発会議）が6月1日から3日まで横浜で開催されたため、多くの関連イベントが行われ、バオバブの会もそのいくつかに参加しました。

イベント参加、その他の活動に際し、皆様からいただいたご協力・御支援に、心から感謝申し上げます。

## ★★★ 活動報告 ★★★

★ 横浜市港北国際交流ラウンジ <http://homepage2.nifty.com/kohokuloung> 企画

「アフリカと友達になりましょう」 ★

日時：2013年4月28日（日）13:30～15:30

場所：港北国際交流ラウンジ

（文責：柳田）

今年はTICADVのパートナー事業として、数多くのイベントが開かれてきました。港北国際交流ラウンジ主催のこのイベントもそのひとつ。バオバブの会はディウフ会長によるセミナーで参加し、サンハレもえこさん率いる“アフリカルチャー”のダンスのワークショップも加わりました。

まずはディウフ会長による、セネガルのイスラムのお話。日本では一般的に知られていないムスリムの生活習慣、戒律や断食などをお伝えしました。集まってくださったお客さんたちは皆さん熱心で、フランスとの関係や教育関連など、多岐に渡る質問も寄せられました。

続いてはアフリカルチャーのダンサーと太鼓グループが登場。アフリカの音楽もダンスも初めてというお年寄りや子どもたちも輪になって踊り、ディウフ会長の歌も加わって、楽しいひととき。最後にはアフリカの服もみなさんに着ていただき、お話、ダンス、衣装を通じてセネガルを体験していただくことができました。

★ 外務省主催 横浜市共催

「アフリカンフェスタ2013」 <http://africanfesta2013.com> ★

日時：2013年5月11日（土）11:00～17:00

2013年5月12日（日）10:00～17:00

場所：横浜赤レンガ倉庫（横浜市中区新港一丁目1番）イベント広場及び1号館1F/2F/3F

（文責：柳田）

2年ぶりとなったアフリカン・フェスタ。コンサートあり、アフリカ料理あり、大使館やNGOの出展あり、屋内ではセミナーやワークショップや写真展もありのこの一大イベントに、バオバブの会は今回も物販と写真等による活動紹介で出展しました。

初日は朝からあいにくの荒れ模様の天候。雨よけのビニールで囲った狭いブース内で、天井からの水漏れにケベサックが襲われるやら、大事な商品を入れたダンボールがぶよぶよに崩れるやら、風雨と格闘しながらの物販となりました。

翌日はうってかわっての晴天。戸外に建ち並ぶブースには色とりどりの雑貨や衣類があふれ、ピーカンの下でアフリカの料理やビールを楽しみながら音楽を聴けるという、まさにお祭りムードに。バオバブの会のブースも、野外ステージからセネガル、コンゴ、ガーナ・・・と次々に音楽が聴こえてくる中、強い陽光にケベサックも映えて、アフリカのイベントにふさわしい一角となりました。

訪れてくれたのは家族連れ、アフリカ滞在経験者、在日アフリカンとさまざまな大勢のかたたち。情報交換などもでき、ケベサックやポーチや絵本、東京・町屋の「アフリカ屋」から委託されたジェンベなども飛ぶように売れました。

★ NGOゴスペル広場主催 <http://www.gospelhiroba.com/html/index.html>

「第4回 **GOSPEL FOR PEACE**」 <http://www.gospel-sq.com/gp2013/> ★

日時：2013年6月1日（土）16:00～20:15

場所：新宿文化センター大ホール

（文責：柳田）

今年で第4回となる「GOSPEL FOR PEACE」。NGOゴスペル広場代表のJENNA(ジェンナ)さんやアフリカン・アメリカンのゴスペルシンガーをはじめ、各地のゴスペル・グループが多数出演して開かれるチャリティー・コンサートです。バオバブの会は3回目の参加。ロビーにてケベサックや絵本などの販売をし、コンサートの合間には、ラオスやカンボジアの教育支援団体、ケニアで井戸作りを行うグループなど、他の参加団体の代表者とともにディウフ会長がステージに上り、活動の紹介や報告も行いました。声の力にあふれる音楽の合間に、多くのかたたちにブースに立ち寄っていただき、募金も寄せられました。

★ セネガル大統領表敬訪問

マッキー・サル大統領



5月末、セネガルのマッキー・サル大統領が、TICADV出席の為に来日しました。サル大統領とディウフ会長とは高校時代以来の友人ということで、ディウフ会長一家が、5月30日（木）の夕方、インターコンチネンタルホテル横浜グラントに滞在中の大統領を訪問した際、バオバブの会の有志も同席させていただきました。

席上、ディウフ会長は、バオバブの会の活動を紹介し、会の信条である「教育はすべてを変える大きな力」を、是非、大統領も共有し、TICADVその他のあらゆる機会に強調して欲しい、と要望しました。

また、セネガルの学校教育への提言をまとめた教育担当大臣宛の文書を、大統領に託しました。提言の要点は、1. 日本の小・中学校で一般的に行われている運動会を、セネガルの学校行事として採用 2. ごみの処理、清掃、整理・整頓などの環境改善教育を、学校で低学年から行う 3. 保健・衛生教育（伝統的な歯磨き棒を使った歯磨き等）を、学校教育の中で徹底 の3点でした。

大統領からは、セネガル、またアフリカのすべての人々を代表して、バオバブの会の皆様に深く感謝申し上げます、という言葉いただきました。そして、最近、セネガルで始まった、新しい教育プログラムの紹介がありました。それは、現在、様々な分野で活躍している人々が出身地の町や村を訪れ、自身の体験を通して子どもたちに教育の大切さを訴える、というもので、大統領ご自身も近いうちに出身地のフンジュンに行く予定、ということでした。

## ★ セネガル訪問

水 野

化粧品と健康食品の「株式会社ファンケル」さんが、この4月から、フェアトレードフーズということで、カンボジアの胡椒、インドネシアとラオスとセネガルの塩の発売を始めました（詳細はこちら→<http://www.fancl.co.jp/healthy/fairtrade/>）。このフェアトレード事業では、途上国の小規模生産者の商品を輸入・販売するだけでなく、＜年間売上の5%を子どもたちの教育を支援するNGOを通して生産国に還元する＞としていますが、セネガルへの還元の窓口としてバオバブの会が選ばれました。6月初めに、そのファンケルさんから、セネガルの塩の生産現場であるカオラック州の Ngathie Naoude ンガティ・ナウデ村を視察に行くが、その際、バオバブの会が支援する学校も訪問したいので、案内役としてディウフ会長に同行して欲しい、というお話があり、ディウフ会長の13年ぶりの故国訪問が決まりました。そこで、かねてからセネガルに行ってみたいと願っていた私も、この機会に夫と共に一緒させていただくことになり、6月26日から7月5日までの10日間、セネガルに行ってくることができました。

10日間とはいってもセネガルにいたのは5日間で、そのうち最初の3日間は、ファンケルの3人の皆さんと共に行動しました。初日にはバオバブの会の現地代理人であるジム・チャムさん宅を訪問し、2日目にはンガティ・ナウデ村を訪れました。その翌日には、ンジャゴ小学校とクール・マジヤベル小学校に加えて、聴覚障がい児の学校、また、AESEH（障がい児童を支援する教師の会）の会長、アマディ・ジャロさん宅を訪問しました。子どもたちの元気な姿と、日本ではとても想像できない困難な状況の中、頑張っている先生方の姿に感動しました。

残る2日間はファンケルさんとは別行動で、フェスタ等で販売するアクセサリーを仕入れたり、セネガル北西部のケベメール市に行き、ここで活動する女性グループ「JIGEEN NU FARLU（セネガルの代表的な民族語であるウォロフ語で＜仕事に頑張る女性たち＞という意味）」を訪ねました。「JIGEEN NU FARLU」は、飯山（香）さん（現在、バオバブの会副会長）が青年海外協力隊員としてケベメールに派遣された際に立ち上げたグループで、アフリカン・プリント布を作ったバッグやポーチの製作・販売を通して、生活の向上を目指しています。バオバブの会では、2009年以来、彼女たちのバッグ・ポーチを輸入し、「ケベサック（ケベメールのサック。sac サックは仏語でバッグの意味）」という愛称で販売していますが、今回、どのような女性たちがどのように作っているのかを実際に見ることができ、とても良かったです。また、彼女たちが、この活動を通して、製作技術だけでなく、読み書きや計算、作業や販売の管理といったものまでを学び、向上させていることが印象的でした。

その後、ファンケルさんと私たち夫婦は、3日の早朝、ダカールを発ちましたが、ディウフ会長は、パスポート更新のために、7日までセネガルに残りました。そして、その間に、ファティック州のサルム・ジャンネ小学校、サルム・ジャンネ中学校、サーバシ・チャム小学校、ジャウ・マリック小学校、サーバシ・チャムアラブ語学校を訪問し、学校の状況や支援の成果を見て、先生方や地域の人々と話し合ってきました。どの学校でも、バオバブの会の支援に対する、心からの感謝が語られたそうです。

このように忙しい旅程ではありましたが、セネガルの文化を楽しむこともできました。「テランガ（ウォロフ語でくもてなしの意）の国」と言われるとおり、行く先々で、おいしい料理や果物やジュースで歓待していただきました。また、「着倒れの国セネガル」とも言われるほど、セネガルの人々はおしゃれです。とりわけ女性たちの色使いと布使いは素晴らしく、民族衣装を着た女性たちが集うところ、まるで色とりどりの花々が咲いたようでした。未だ多くの課題を抱えてはいるけれど、多様な魅力とく未来性>に満ちた国だと感じました。

ンジャゴ小学校での歓迎式典



クール・マジヤベル小学校での歓迎



## ★★★★ ことわざで開く、アフリカ文化の窓 ★★★★★ 第9回 『異邦人』

エル・ハッジ・マサンバ ディウフ (訳・文責 水野)

本年は、アルジェリア生まれのフランス人作家、アルベール・カミュの生誕100年に当たります。カミュといえば *ÉTRANGER* ですが、1942年刊行のこの作品は、日本では『異邦人』という題で知られているようです。が、実はフランス語の“ÉTRANGER”には二つの意味があります。一つは「人」を指すもので、その国や地方の出ではない人のこと、日本語ではく異邦人>とかく外国人>と言われるものです。そして、もう一つは「場所」を表し、自分の故国や故郷ではない場所、日本語でく異邦>やく外国>と言われるものを意味します。

セネガルの代表的な民族語であるウォロフ語では、前者は“GANN”（ガン そこに滞在するく招かれた人>またはく訪問者>）か“DOHANDEEM”（ドハンデム くそこを通過する人>）となりますし、後者は“BITIM REEW”（ビティムレウ 直訳するとく国の外>）か“ALLH”（アール 直訳するとく森>）となります。

今の世の中で都会生活を送る人には、く国の外>とく森>とが同じ言葉になるというのは、奇妙に思われることでしょう。しかしよく考えてみると、く外国へ行く>というのはく自分の国を離れる>ことであり、く見知らぬところへ行く>ことです。そして、見知らぬところへ行くときには、深い森に分け入るときと同じような危険があることが予測できるのではないのでしょうか。いや、むしろ、原始林の中で野獣や蛇に見られたり知られたりして襲われることよりも、パリなりダカールなりのある種の地区で誰かから攻撃されることのほうが、はるかに多いと言えます注1。

<国の外=外国>と<森>と同じ言葉で表されるような社会では、<外国>はネガティブなものとしてされ、<外国人>は軽蔑され、それどころかひどい扱いを受ける、と思われるかもしれません。ところが、いくつかのことわざによりますと、アフリカの社会では、<訪問者>であれ、<招かれた人>であれ、または単に<そこを通過する人>であっても、<外国人>にはあらゆる権利が与えられているようです。中でも、<テランガ=篤いもてなし>の伝統を誇りとするセネガル人は、「**外国人には特権がある**」とか「**外国人は好きなように振舞うことができる**」と言います。が、コンゴのバテケの人々が「**客人在るところにはご馳走がある**<sup>注2</sup>」と言うのを聞けば、<テランガ>は、何もセネガルだけの伝統ではないことがわかるでしょう。

さて、どこの国の人であっても、自分の国を離れば、そこは<外国>、自分の国ではない場所に行くことになるわけですが、そのときには、守らなければならないいくつかの決まりごとがあります。

私も、外国へ出発しようとしたときには、いつも、それらの決まりごとを、まるでトレーニングのように学んだものです。セネガルの習慣では、故郷の村を離れて長い旅に出るときには、何人かの親しい人々に一別な村に住んでいる人になら、遠くまででも足を運ぶ必要があります。また、村のお年寄りたちに、控えめにですが<sup>注3</sup>、お別れの挨拶をしなければなりません。それは、その人たちに敬意を表することであり、祈りと助言をもらうためでもあります。

私が日本に来るときにももらった中で最も良い助言は、「**外国に着いたとき、もしも人々が片足で歩いているなら、お前も両足でなく、彼等のように片足で歩きなさい**」というものでした。この助言は母からだけでなく、たくさんの人々からももらいました。一方、母だけからももらった助言は、次のようなものでした。「**気持ちを楽しんで、彼等が食べているものは、すべて食べなさい。彼等がそれで死なないのなら、お前も死ぬことはないのだから**」。私が母の台所を離れても、飢えて死ぬことがないように、と、母なりの予防策を講じたのでしょうか。それならば、母は成功しました。私は、新しい食べ物を前にしたとき、ほぼ毎回、躊躇うことなくそれを食べましたので。「ほぼ」と言ったのは、寿司が初めて出てきたときには、食べるのに苦労したからです。けれども、寿司を食べてお腹を壊すことが何回かあっても、私は諦めませんでした。その結果、どうでしょう！ 今では、寿司は、肉じゃがや納豆卵かけご飯と同様、大好きな食べ物のひとつになりました。

本当に、私が今あるのは母のおかげです。母は、私を産んでくれただけでなく、私が、どこに在っても、その場所で幸せに生きる方法を教えてくれました。

母のことを語り始めるときがありません。誰だって<お母さん>には熱い思いがあるものなのに、私の母だけが特別な人のように言い立てるのは止めましょう。

そして、お別れする前に、皆様への助言として、二つのことわざを紹介したいと思います。一つはカメルーンのもので、皆様が<外国人>を受け入れる側となったときのためであり、もう一つはタンザニアのもので、皆様自身が<外国人>となったときのためです。

カメルーンのことわざ：「**ここではちっばけな蠅も、故郷に帰ればラフィアの山**」

<ラフィア>というのはラフィア葦で織った布のこと、<宝物>を意味します。もしその<外国人>が貧相に見えたとしても、馬鹿にしてはいけない、故国では立派な人なのかもしれないのだから、ということになります。

タンザニアのことわざ：「**よそに行ったら目を開き、口は閉じなければならない**」

外国に行ったら、あれこれ批判する前に、まずは大きく目を開き、その国の人々の暮らし方を学びなさい、ということなのです。

先日、13年ぶりにセネガルに帰ってきました。久しぶりの故国は大きく変わっていて、私はずいぶん<

日本人化>してしまったからでしょうか、自分が<異邦人>であるかのように感じました。そこで、私は、上の二つ目のことわざの通りに振舞わなければなりませんでしたよ！

注1 大部分の動物は、次のように振舞うものです。

その1. 動物は、とてもお腹が空いているか（彼等にとって人間の肉はあまりおいしくありません）、攻撃されたときにしか人間を襲いません。つまり、身を守るためにだけ襲ってくるのです。

その2. 動物のほうは先に人間に気付くと、彼等は自分達が人間に見られないように務めます。彼等のほうから道を変えて遠ざかろうとします。

ですから、森の中を歩くときには音をたてるように、とされています。私たちがいることを動物に知らせることが必要です。そうでないと、不意をつかれた動物は、身の危険を感じ、身を守るために襲いかかってきます。

注2 客人がきたら、方法をつくして、ご馳走を振舞わなければなりません。客人のほうも、たくさんいただかなければいけません。

注3 外国に行くとか別な仕事に就くとか、人生の中で大きく道筋を変えるときには、けっして騒ぎ立ててはいけません。控えていないと、運が逃げていって、新しい暮らしがうまくいかない、とされています。

### ★★★ イベント速報 ★★★

神奈川県最大の国際交流イベント「よこはま国際フェスタ2013」の開催が下記のように決定しました。

日時：2013年10月19日（土）20日（日）

10：30～16：00

会場：象の鼻パーク

\* 開催の詳細、また、バオバブの会の参加につきましては、次号でお知らせする予定です。

\* バオバブの会は会員の皆様の会費で運営されています。今年度の会費を未納の方は、急ぎお納めくださいますようお願い申し上げます。

\* ご寄附は、常時、受け付けております。下記の口座迄、お願い申し上げます。

#### バオバブの会

〒240-0052 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西谷町993-35

TEL&FAX 045-373-0059 HP:<http://the-baobab.org>

代表 エル・ハッジ・マサンバ ディウフ

#### 寄付振込先:

三菱東京UFJ銀行八重洲通り支店普通口座no.1523673

ゆうちょ銀行振替口座 00200=1 45215